

## 英授研との出会い

武田 富仁（桐生市立商業高等学校定時制）

皆様、お変わりありませんか。皆様と本学会との出会いはどのようなものだったのでしょうか。恐らくいろいろなきっかけで、ご入会いただいていると思われまふ。これから少しだけ昔話をするをお許しください。

学生の頃、教職課程は履修していましたが、運動部にも所属してて、テニスコートと教室の往復の思い出しかありませんでした。

ただ、このままでいいのかなという思いが、漠然とですがありました。偶然、書店で雑誌『英語教育』が目にとまり、何気なく手に取りました。当時は、『現代英語教育』もありました。それぞれの記事を楽しんでいました。素直に「すごいなあ」「きっと雲の上の人なんだろうなあ」という感想でした。

雑誌の巻末に、学会・研究会情報があり、「教師になるなら、授業が大切だよなあ」という思いで眺めていると、発足間もない、英語授業研究学会の文字が目にとまりました。まさに、「授業研究」の名の学会名でした。回数がまだ一桁の頃にお邪魔したことがありました。私自身、授業を分析し研究するという発想がなく、とても新鮮で大いに刺激を受けました。今思えば、発足間もない頃の樋口忠彦先生や高橋一幸先生にお会いしていたのだと懐かしく感じています。今でも脳裏に焼きついていて、身の引き締まる思いです。

もう一つ、教師としての在り方に大きく影響を与えたのが、安藤貞雄先生の『英語教師の文法研究』（大修館書店）の一節です。少し引用します。

### 13.3.1 「教師」ということ

中学・高校においても、事情が本質的に異なるとは思えない。勉強していないで、放課後は仲間と麻雀ばかりしているような教師が生徒に向かって勉強せよと言ったところで、どれほどの説得力があるだろうか。私の体験では、中学・高校で一番勉強しない（傾向がある）のは、英語と数学の教師であろうか。例えば社会科の教師などは、政治・経済・歴史・思想などの各分野にわたって、流動の激しい動向を絶えず follow している必要に迫られると思われるが、英語や数学の教師は、教師用手引きさえ見れば、なんとか毎時間お茶を濁すことができるからである。（同掲書 335 ページ）

30年以上も前のことですが、今でも初めて読んだときの衝撃は鮮明に覚えています。後半の「13.3.2 理想の教師像について」の箇所も大いに刺激を受けました。

教師としてのあるべき姿が少しずつ醸成されていきました。

月日は流れ、関東支部も発足となり、例会にもときどき足を運んではいましたが、日々忙殺されていることを理由に、自分の授業を見直すことにはあまり熱心ではありませんでした。ただ、心のどこかにこのままではいけないという思いはありました。

そんな折り、約20年前、勤務校が英語の研究指定校となり、研究する機会をいただきましたが、一体何をどうすればいいのか途方に暮れていました。運営指導委員の金谷憲先生や英授研関東支部の先生方にご指導いただきながら、少しずつ方向性が見えてきたときは、とても嬉しくなりました。また、例会に通ううちに支部運営委員として仲間に入れていただくご縁も頂戴しました。

研究課題に沿って学校全体で授業改善を進めていくと、生徒が英語を使うことに抵抗がなくなり、積極的に授業に参加するようになりました。また勤務校の先生方も研究の方向性が具体的になり、一体感が出て同僚性も育まれました。道のりは険しかったですが、何とか研究を終えることができたのも多くの先生方をはじめ、ご協力いただいた皆様方のお陰と今でも感謝しています。

高橋一幸先生・久保野先生・太田先生・阿野先生をはじめとする関東支部の先生方には本当にお世話になりました。3年間の研究期間に発表の機会をいただき、厳しさの中にも愛情あふれるご指導をいただきました。また、群馬英授研の先生方にも本当にお世話になりました。どれだけ励まされたか、言葉では言い表すことができないくらいです。

全国大会のお手伝いをするうちに、関西支部の先生方とも近しくさせていただきました。加賀田先生をはじめ、関西支部の先生方にも本当にお世話になっています。

もし、英授研の先生方との出会いがなければ、恐らく、教師としての在り方が違っていました。先生方の学問に対する真摯な姿勢と生徒への愛情深い温かな眼差しが、迷い、くじけそうになる私を勇気づけてくれました。本当にありがとうございます。

また皆様と例会などでお会いできることを楽しみにしています。いろいろお話しをお伺いできればと思います。

## 関東支部 第24回 春季研究大会報告（オンライン開催）

日 時：2021年4月18日（日）（13:00~16:40）

テーマ：小中高一貫した英語教育の在り方について考える

～新学習指導要領下の小中接続元年を迎えて～

### 1. 指導・評価法紹介リレー

#### ■小学校

評価—小学校で大切にしているもの

発表者：赤井 晴子（埼玉県鶴ヶ島市立新町小学校）

#### ■中学校

限られた時間でつくる「理解と発話のためのアウトライン」

～情報を整理し、即座に考えを形成する手段として～

発表者：吉澤 孝幸（秋田県立秋田南高等学校中等部）

#### ■高等学校

新指導要領における授業の変わらないこと・変わること

発表者：八木 孝之（東京都立新宿山吹高等学校）

今年度は、小学校における新学習指導要領の実施1年目を終了し、本年度から中学校でも実施となるまさに「小中接続元年」の年である。そこで、「中高一貫した英語教育の在り方について考える」をテーマに小・中・高それぞれの先生方からご発表いただいた。

赤井先生からは、小学校における指導の実態の共有と、小・中接続に向けて、中学校の先生方に大切にしてほしいポイントなどを示していただいた。

吉澤先生からは、言語活動の充実が求められているなかで、情報を整理し、円滑なアウトプットにつなげるための指導の工夫についてご発表いただいた。

八木先生からは、様々な変化がある中でも、英語教育を行うにあたって変えずに大切にしていけるべきポイントについてご発表していただき、英語教育の軸となる部分を再確認することができた。

それぞれの立場からの考えや工夫を示していただき、小・中・高接続に向けて、とても有意義な時間となった。

小山 優子（千葉県東金市立東金中学校）

## 2. 高校卒業生によるミニ座談会

### 2020年度の学びと新入試を振り返って

発表者：今春高校を卒業した大学生3名

英語の授業実践や指導法について研究する本学会において、学習者の視点やニーズを捉えることの大切さに再度注目することをねらいとして、高校を卒業したばかりの大学生3名を学会に招いて、高校時代の英語学習や授業、実施1年目の共通テストを受けた感想などについて語っていただきました。都立高校出身の方、都内と北関東の私立中高一貫校の方、それぞれが学んだ学校や進学先(国公立大学や私立大学)は異なるものの、座談会では共通して「英語をことばとして学ぶことの大切さ」や「学校の授業や教員の影響の大きさ」が語られました。大変貴重な学習者の「生の声」に耳を傾け、あるべき英語の指導や授業について考えていく大切さを改めて感じました。

<卒業生から寄せられた声>

「普段から学校の授業で様々な形式の英語に触れてきていたので共通テストに変わっても不安はなかった。普段の授業が自信になった。」

・理想の学校の先生や授業は？という問いに対して…

「やはり生徒に考える力をつけさせてくれる先生がいいと思う。」

「生徒主体の授業の時間を作ってほしい。」

「勉強面だけではなく英語圏の文化やその面白い事例も交えて授業をしてくれる先生が理想かなと思います。かと言って休み時間っぽくなりすぎないで、やるときはやる！といったふうに教室の空気感を切り替えられる先生はいいなあと思います。」

当日ご講演をいただいた文科省の山田教科調査官をはじめ、参加いただいた多くの先生方からご好評をいただきました。本学会に(元)生徒に登壇してもらおうという初めての試みにご理解ご協力をいただいた先生方、そして何より登壇して英語の授業や学習の在り方について考えてくれた3名の卒業生の方々にこの場を借りて感謝申し上げ、まとめとさせていただきます。大変ありがとうございました。

津久井貴之(大妻中学高等学校)

## 3. 講演

### 新しい観点による学習評価から指導の在り方を考える

～指導と評価の一体化を通して～

講師：山田 誠志(文部科学省初等中等教育局外国語教育推進室 教科調査官, 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官)

山田誠志調査官から新しい学習評価からの指導のあり方についてお話を伺った。聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り], 話すこと[発表], 書くことと4技能・5領域とな

り、観点も4観点から3観点に変更となった。知識・技能は英語使用の正確さを評価する観点であり、思考・判断・表現は表現内容の適切さを評価する観点である。思考・判断・表現を評価する際、目的・場面・状況を具体的に設定することで生徒の取り組みも変化するため、指導者も生徒にわかりやすいように具体的に条件を設定する必要がある。理解の領域では、聞くこと、読むことでは、内容を知識・技能として評価し、概要や要点、必要な情報を思考・判断・表現として、評価しなければいけない。事前に指導者が質問や問いがどの評価の観点に該当するかを理解し、整理する必要がある。

また新学習指導要領では、言語活動を通して指導をすることが求められる。今までは教員が言語材料を提示、生徒がその言語材料を練習し、そして生徒に言語活動に取り組むような指導が主流であり、言語活動に取り組むことが目的化していた。しかし、知識・技能を活用しながら、思考力、判断力、表現力を育成するために、言語活動に取り組みせながら、内容面、言語面から生徒の必要に応じて指導し、再度言語活動に取り組ませるような指導が求められる。また生徒の思考力や判断力を奪わないように、事前の示しすぎや教えすぎは控える必要がある。

江尻 友也（千葉県流山市立おおたかの森中学校）

## 関西支部 第31回 春季研究大会報告（オンライン開催）

日 時：2021年6月20日（日）13:00~17:00

### 1. 授業実践紹介と研究協議

#### ■中学校

#### 教科書を活用して即興性を高める授業 —Striving for a Better World（中3）—

発表者：熊上 絵里（枚方市立第三中学校）  
コーディネーター：和田 憲明（姫路大学）

授業を見て印象に残る場面がたくさんあった。

まず初めに、クラスの温かい雰囲気である。生徒はいつも笑顔で、教師とのやり取り、ペア活動、発表をしていた。教師とのラポートがしっかり構築されている証拠である。移動されて一年目でこれほどまでの信頼関係をつくられているのは驚きに値する。どのようにすればそのような関係がつけられるのか。その場面が何度か授業の中で垣間見ることができた。例えば、生徒が何か発言したときに、細かく Feedback されているところである。熊上先生は生徒の発言を聞き取り、良い発言を復唱したり、内容面を具体的に述べ、次の活動につながるようにされたりしていた。他には、発表者に惜しめない賛辞を送り、挑戦したこと

に対する労いの言葉をかけられていた。褒められて嫌な生徒はいないだろう。さらに教師の明るい雰囲気も影響を与えているだろう。常に明るく元気よく指導されている先生の姿を見て影響を受けた生徒は多いはずである。

印象に残る二つ目として、先生のテンポの良い English に対して、子供たちが反応していることである。それはしっかりと英語を理解している証拠であり、先生の発言に対して、当たり前のように頷くことでできていた。特に本文の復習の際、Picture Card を使って説明をし、子供たちに質問している時、多くの生徒が挙手していた場面は圧巻である。毎時間、英語をシャワーのように浴び続け来た生徒は、自然と英語を聞き取れるようになっていったのだろう。

三つ目として、生徒の即興力である。帯活動の Chat and Report では、友達との話の後、ランダムに当てられた生徒が発表。その内容に対してさらに英語でレポーティングと、即興そして即興と続く場面が見られた。他にはジグソーリーディングの後、絵をホワイトボードに書いてリテリングする時、グループに戻ると同時に自分の考えを発表することができていた。クラス発表の際にも、即興で堂々と発表する姿が見られた。

最後に、本時の目標は内容理解であったが、スー・チー女史の行動についてどう思うのか考えさせる場面も強く印象に残っている。本文の内容をただの穴埋め問題だけでなく、自分ならどう思うのかと考えさせることで、教科書を通して深い学びにつながっていた。授業後彼女のことについてもっと深く知りたいと思った生徒もいたことだろう。

以上、授業を通して印象に残る場面が多々あった。先生の今後の活躍が楽しみである。

秋山 容洋（姫路市立四郷学院後期課程）

## ■高等学校

### 『書くこと』をゴールとした4技能統合型授業 —英語表現Ⅰ「比較」の授業—

発表者：有馬 麻子（大阪府立 富田林高等学校）  
コーディネーター：平田 健治（奈良女子大学附属中等教育学校）

「書くこと」は4技能の中でも、苦手と感じる生徒が多いのではないのでしょうか。しかしながら有馬先生の生徒さんの作品を拝見して大変驚きました。紙いっぱいに書かれた文章の中に、General Statement や読み手を引き込む Hook が用いられ、またタイトルも目を引く工夫がなされていました。有馬先生は指導においてたくさんの工夫をされておられました。授業の「聞く」場面では “It’s Okay to Be Smart” という動画を、必要な内容に絞って編集して見せておられ、また「読む」場面では新聞記事を提示しておられるとのこと。また、テーマづくり、モデル文の作成・提示、フィードバック、添削の中でも、生徒が興味を持つテーマの設定や、明示的な説明を減らすことができるモデル文も効果的であると思われまます。特に “I would rather than” の例に大泉洋、イモトアヤコ、星野源を挙げて生徒が

沸いている教室が目には浮かびました。

後半に提示された調査の結果も大変興味深い内容でした。指導者が採点時にミス指摘するかしないかによって、「高校入学時の自分と比べて、英語で文章を書くことは上達したかと思いませんか」について大きな差が出ていましたが、指導者がミス指摘してない生徒の方が、上達したと感じていました。ミスばかりを指摘して、生徒の意欲や自信を害していることもあるかもしれません。好きこそものの上手慣れとは言いますが、有馬先生の熱い思いと手厚いご指導に、生徒が「書くこと」を楽しんでいる様子がかがえるご発表でした。

今西 竜也（京都教育大学附属京都小中学校）

## 2. 講演

### 新学習指導要領で求められる小中高の連携

講演者：向後 秀明（敬愛大学）

司 会：加賀田 哲也（大阪教育大学）

ご講演では、新学習指導要領をベースとして、評価の3つの観点から小中高の具体的な連携の方法をご教示いただいた。

まず、「知識・技能」では、英語指導者として、「英語力」と「英語指導力」の大切さを強調された。「英語指導力」ではスピーキング指導が Discussion から Writing の手順となっておらず、いまだに Writing から Discussion となっているため、原稿読み上げのレベルに留まっている、とのご指摘があった。

次に、「思考・判断・表現」では、「知識・技能」を身に付けてから「思考・判断・表現」が育成されるのではなく、相互に繰り返すことで学習内容の理解が深まることを示された。

また、「主体的に学習に取り組む態度」では、小中高の連携について、近隣校で実効性のある「年間指導計画」の作成を協議することから始める方法や、授業映像の定期的な交換やオンラインディスカッションをとおして建設的な議論を進めてはと提案された。協議の際の留意点として、他校種から学ぼうとする姿勢や改善すべき点を指摘し合うことを挙げられた。

最後に、向後先生が話された「評価の本質は他者との比較ではなく、過去の自分との比較」という言葉が深く印象に残った。評価は何のためにあるのかを再考しつつ、改めて一人一人の子どもたちの学びや成長を大切に育んでいきたいとの思いを再認識させられた。子ども主体の学びを展開することへの、熱い思いが画面越しでも十分に伝わる講演をしていただいた向後先生に改めて感謝したい。

神原 勝（宝塚市立御殿山中学校）